植草学園大学研究紀要　　第12巻　107 ～ 116頁（2020）

B.Edu.Health Sci.UG Univ. vol.12, 107-116, 2020

調査報告

# 学生の指導技術獲得を目指した「道徳教育指導法」の取り組み

## ――模擬授業と協議の積み重ねを通して――

村上　悦子 [1]

[1] 植草学園大学発達教育学部

植草学園大学は,「徳育」を教育の根幹としている。思いやりのある共生社会を作り出す人間の育成と共に,道徳の授業を通して思いやりをはじめとする「徳育」を教育できる教員の育成を目指している。それには,自信をもって道徳の授業を実践できることが必要であると考える。また，道徳は平成 30 年度から小学校で教科化され,子供主体とした「考え,議論する道徳」を行うために,指導技術を獲得する必要がある。そこで,指導技術を獲得する手段として「道徳教育指導法」で模擬授業と協議を充実させる取り組みを行った。その結果，学生の指導技術の向上が確認できた。受講後のアンケートでは，受講者全員が，授業で得た指導技術を教育実習等で役に立てたいと回答した。今後，受講者が獲得した指導技術を活用し，教育現場において子供の道徳性を育てる授業を展開するためにも近隣の小学校と連携を取り，実践できる環境を整える必要がある。

**キーワード：**特別の教科 道徳，模擬授業，協議，指導技術

## 1．はじめに

### 1.1　道徳の教科化

昨年度から小学校と特別支援学校小学部で「道徳の時間」が「特別の教科　道徳」になった。道徳が教科化された理由は，①歴史的経緯に影響され，いまだに道徳教育そのものを忌避しがちな風潮があること，②他教科等に比べて軽んじられていること，③読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導が行われている例があることなど，これまで多くの課題が指摘されてきた（文部科学省，2013）。

また，いじめの問題に起因して，子供の心身の発達に重大な支障が生じる事案や尊い命が絶たれるといった痛ましい事案まで生じており，いじめを早い段階で発見し，その芽を摘み取り，全ての子供を救うことが喫緊の課題となっている。

このような現状の下，内閣に設置された教育再生実行会議は，平成 25 年 2 月の第一次提言において，いじめの問題等への対応をまとめた。その中では，心と体の調和の取れた人間の育成の観点から，道徳教育の重要性を改めて確認し，その抜本的な充実を図るとともに,新たな枠組みに教科化が提言された。

### 1.2　教育現場の現状

平成 27 年 3 月 27 日に学校教育法施行規則を改正するとともに，小学校学習指導要領，中学校学習指導要領及び，特別支援学校小学部・中学部学習指導要領の一部改正の告示を公示した。今回の改正は，いじめの問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものとする観点からの内容の改善，問題解決的な学習を取り入れるなどの指導方法の工夫を図ることなどを示したものである。「多様な価値観の時に対立がある場合を含めて，誠実にそれらの価値と向き合い，道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本資質である」との中央教育審議会の答申を踏まえ，発達の段階に応じ，答えが一つではない道徳的課題を一人一人の児童が自分自身の問題として捉え向き合う「考え,

議論する道徳」へと転換を図るものである。

これに伴い，教育現場では道徳の研修会が盛んに行われ,多様で効果的な道徳教育の指導方法を学び,指導技術の向上に努めている。

### 1.3　教員養成大学に求められること

前項で述べたように現場の教員が指導技術向上に努めることも大切であるが，より早い教員養成大学で学修する段階から指導技術獲得を目指した取り組みが必要だと考える。

小学校の現場は中学校や特別支援学校と違い，初任者から１人で学級担任をする状況である。児童や保護者からは，ベテランも初任者も同じ教員として見られる。だからこそ大学での学びを即，学校現場で活かす必要があると考える。

千葉県・千葉市教員等育成指標では,「教職に必要な素養」「学習指導に関する実践的指導力」「生徒指導に関する実践的指導力」「チーム学校を支える資質能力」の４つの柱がある。「学習指導に関する実践的指導力」の養成段階の中に「指導技術」が挙げられている。教育現場の状況から鑑みて，道徳科の基本的な指導技術は，大学等の養成段階で確実に身に付ける必要がある。そのために，本大学で行う「道徳教育指導法」では，学生による模擬授業に着目した。土田（2017）は,「指導技術の向上を図るには模擬授業の実践である。模擬授業が実施する側も受ける側も大きな学びになる」(p. 52）と述べている。

### 1.4　指導技術

よりよい授業づくりのためには，指導技術を高めることが必要である。授業のねらいを達成するには,児童の感性や知的な興味などに加え，児童が問題意識をもち，主体的な考え，話し合うことができるように，ねらい，児童の実態，教材や学習指導過程などに応じて，最も適切な指導方法を選択し，工夫して活かすことが必要である。

指導方法や指導技術の工夫の例としては，次のようなものが挙げられる。

| |
|---|
| ①教材の提示　②発問　③話し合い活動　④書く活動　⑤動作化や役割演技など表現活動　⑥板書　⑦説話　⑧机間指導 |

## ２．研究の目的

学生による模擬授業とその後に行う協議を積み重ねることで，学生の指導技術獲得につながることを実践と分析を通してその成果と課題を明らかにする。

学生の指導技術については，前項の例で示した中から「発問の吟味」「板書」「教材理解の工夫」「机間指導」を取り上げていく。

## ３．研究の方法

**(1) 対象授業：**植草学園大学で行われている「道徳教育指導法」の授業

**(2) 受 講 者：**2.3 年次学生，科目等履修生，長期研修生　計 37 名

**(3) 期　　間：**2019 年 4 月～ 9 月

**(4) 受講者アンケートの実施**

**a．受講前アンケート**

1. 道徳のイメージ「かたい，柔らかい，楽しい，つまらない，面白い，明るい，暗い，その他」の項目から選択し（複数回答可），その理由を記述する。

2. 小中学生の時，道徳で活用したもの「学校教育放送，ビデオ，副読本，ワークシート，役割演技，グループ活動，ディベート，心のノート，覚えていない」の項目から選択する（複数回答可)。

3. 道徳教育指導法でどんな力を身に付けたいかを記述してもらう。

**b．受講後アンケート**

1. 道徳のイメージ（受講前アンケートと同様）

2. 受講して，そうだと思うものを５段階評価（5: 強くそう思う,4: そう思う,3: どちらとも言えない,2: そう思わない,1: 強くそう思わない)で回答する。項目は「①道徳が好き（になった),②道徳は面白い,③道徳は奥が深い，④全体として学びになった，⑤道徳の授業を実践したい，⑥毎週授業を楽しみにしている，⑦教育実習で役立つ授業だった」

2-2 ⑦で「強くそう思う」「そう思う」と回答した人に何を役立てたいか５段階評価で質問する。項目は，①教員による模擬授業②自分のグループで実践した模擬授業③他のグループが実践した模擬授業④聴き合い活動⑤ワークシート⑥板書⑦掲示物

⑧机間指導⑨発問⑩児童（役）への受け答え

3. 授業で何を得たり学んだりしたと思うか。項目は，①道徳教育と道徳科について②自分とは違う新しい意見や考え③人と関わる楽しさ④道徳授業を観る視点⑤道徳授業の実践意欲⑥視野の広がり⑦責任感⑧協調性⑨異学年での学び合い⑩他者とよりよく生きること⑪子供が考える時間の確保⑫多面的・多角的な考えの尊重⑬子供主体の授業構成⑭道徳の目標，ねらい，内容⑮授業の導入，展開，終末

4. 模擬授業と協議を積み重ねたことで，どんなことに気付いたかを記述してもらう。

**(5) 受講者による模擬授業と協議の記録分析**

記録分析は，模擬授業の観察や写真，協議中の録音，受講者からの感想等を基に，模擬授業と協議を積み重ねて，その変容を分析する。

## 4．結果

### 4.1　受講前アンケート調査の結果

道徳のイメージについて「つまらない」と回答した受講者が 33 名中 6 名いた。理由を見ると，「登場人物の気持ちを考えて発表するだけ」「教科書を読んで書くことばかりで国語の授業みたい」「記憶に残っているものではないから」などが挙げられた。これは，文部科学省で出された「読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導が行われている」の課題と重なる。

小中学生の時，道徳で活用したものについての回答は,図 1 の通りである。小学生時に「心のノート」を活用したと回答した受講者が 33 名中 27 名と全体の 82%と多かった。次いでグループ活動 15 名，教育放送，ワークシートの 13 名であった。中学生時では，ワークシートが 13 名，グループ活動が 12 名であった。いずれにしても受講者の 40%に満たなかった。

副読本の活用について，小学生時に 7 名，中学生時に 3 名と全体の 20%程度，中学生時に至っては 10%未満であった。副読本は現在の教科書に相当するものである。副読本の記憶が少ないのは，読んで感想を述べるだけの授業を行っていたことが推測される。

また，「覚えていない」と回答した受講者が，小学生時で 2 名，中学生時で 9 名であった。

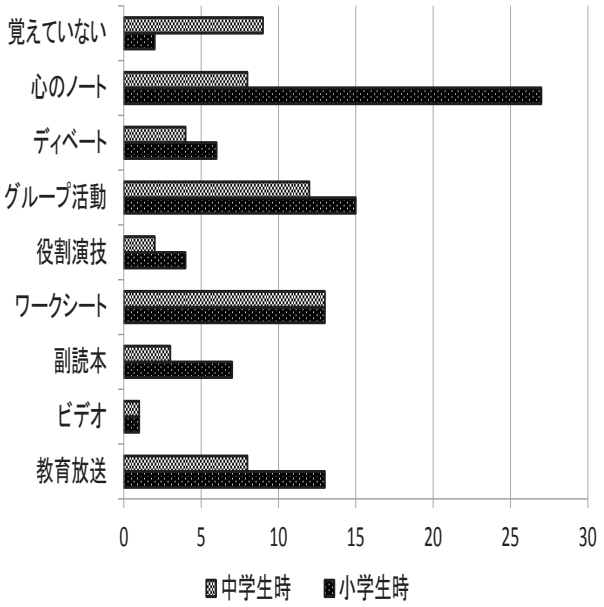


**図 1　小中学生時の道徳で活用していた教材や活動**

道徳教育指導法でどんな力を身に付けたいかの問いについて回答は，以下の通りであった。

・児童同士の関わりを円滑に行う技術 4 名
・児童の意見を引き出せる力 4 名
・児童にとってよりよい指導力 3 名
・児童に考えさせることができる指導力 3 名
・思いやりの心を身に付け，それを指導する力 3 名
・道徳の授業を指導する上で大切なこと 2 名
・授業展開方法 2 名
・児童が楽しいと思える指導力 2 名
・道徳への理解 2 名
・児童が積極的になれる授業
・指導案の書き方

### 4.2　受講後アンケート調査の結果

**(1) 道徳のイメージ**

受講前と同様に道徳のイメージについて調査した。以前「つまらない」と回答した 6 名の受講者は，「柔らかい」「楽しい」「面白い」とプラスのイメージに変容した。

「柔らかい」と回答した受講者の理由は，「児童の意見で授業を作りあげている雰囲気が柔らかい」「人間性を育てるものだと思った」であった。

「楽しい」と回答した受講者の理由は，「グループ

での活動や模擬授業を通して,道徳への関心が持ち,意欲的に取り組めたから」であった。

「面白い」と回答した受講者の理由は,「様々な人の意見が聞ける」「自分で最後の答えが出せる」であった。いずれの受講者も「登場人物の気持ちを考えて発表するだけ」のイメージから脱却していた。

また,「子供たちには自分が当初思っていたようなマイナスのイメージをもたないように授業をしたいと強く思った」との回答があった。

### (2) 受講後に思ったこと

受講して，そうだと思うものを5段階評価で回答の結果,「5: 強くそう思う，4: そう思う」と肯定的な回答は,「教育実習や教育現場で役に立つ授業だった」「全体として学びになった」「道徳は奥が深い」「道徳が好き(になった)」の項目で100%だった。特に,「教育実習や教育現場で役に立つ授業だった」の項目は，32名中27名と84%の受講者が「強くそう思う」と回答した（図2)。

### (3) 教育現場で役立てたい内容

「具体的に何を教育現場で役立てたいか」について「5: 強くそう思う」の回答に着目すると，上位は「机間指導」22名（69%),「発問」「聴き合い活動」20名（63%),「児童の受け答え」「板書」「教員による模擬授業」19名（59%）だった（図3)。

### (4) 授業で得たり，学んだりしたこと

この項目についても,「5: 強くそう思う」の回答に着目した。上位は「授業の導入，展開，終末」(指導過程)「子供主体の授業構成」25名（78%),「道徳授業を観る視点」21名（66%),「子供が考える時間の確保」20名（63%）だった（図4)。

### (5) 模擬授業と協議を積み重ねたことでの気付き

**【受講者の感想】**

- 「子供に考えさせる」ことが大事なのだと気付いた。
- 力がついてきたと思う。他の班のよいところにも気づけるようになった。
- 実際に模擬授業をして協議すると自分では気づけないことに気付けた。
- 後半のグループになるにつれ，改善点が減り，授業がグレードアップされていると思った。
- 積み重ねによって，どんどん授業が改善されていったように感じた。前の班の改善点を次の班が活かすことをしていた。
- だんだんとよい点や改善点を見つけやすくなってきた。協議は大切。
- 教師主体ではなく，どのように児童が学ぼうと思うことのできる授業展開の方法について気付いた。
- 回を重ねることにより，授業がよりよいものになって全員の向上心を感じた。
- 回を重ねるにつれ,授業を評価する目が鋭くなった。
- たくさんの模擬授業を観たことにより，多くの知識や技術を得ることができたと思う。
- 授業の質が高まった。机間指導を行う意味が深く理解できた。
- 授業を観る視点が変わってきた。自分の意見を持つことができるようになった。
- 子供主体の授業の大切さ。面白さ，組み立て方
- 実習に行く前に知りたかったことが多かった。
- 机間指導のやり方と重要性。
- 毎回の協議で改善点が見つかり，その改善により授業の質が上がった。協議がステップアップに。
- どのようにしたら子供主体の授業になるのか知ることができた。
- 授業をつくる上で様々な視点から授業を観ることができるようになった。

**※二重下線部：授業の改善や向上に関する記述**
**下線部：授業を観る視点に関する記述**
**波下線部：子供主体の授業に関する記述**

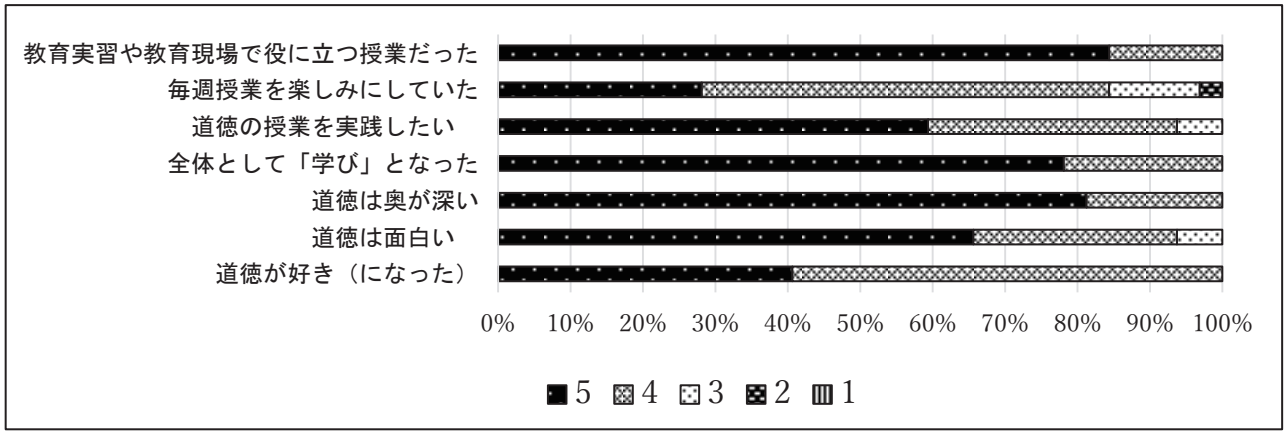


図２　受講して自分が思ったこと

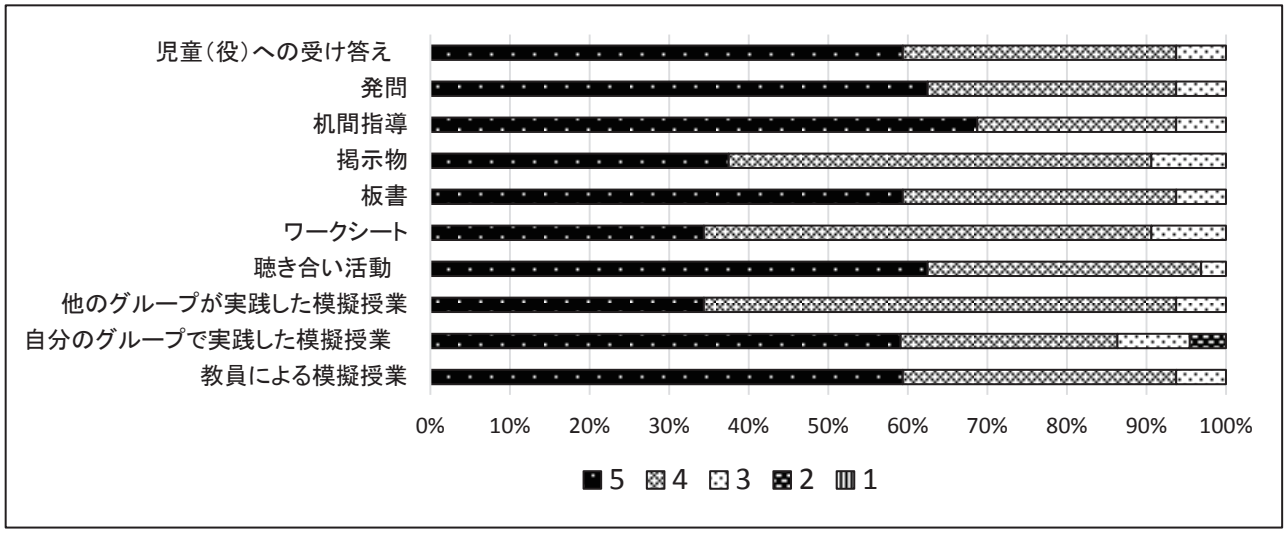


図３　教育現場で役立てたいこと

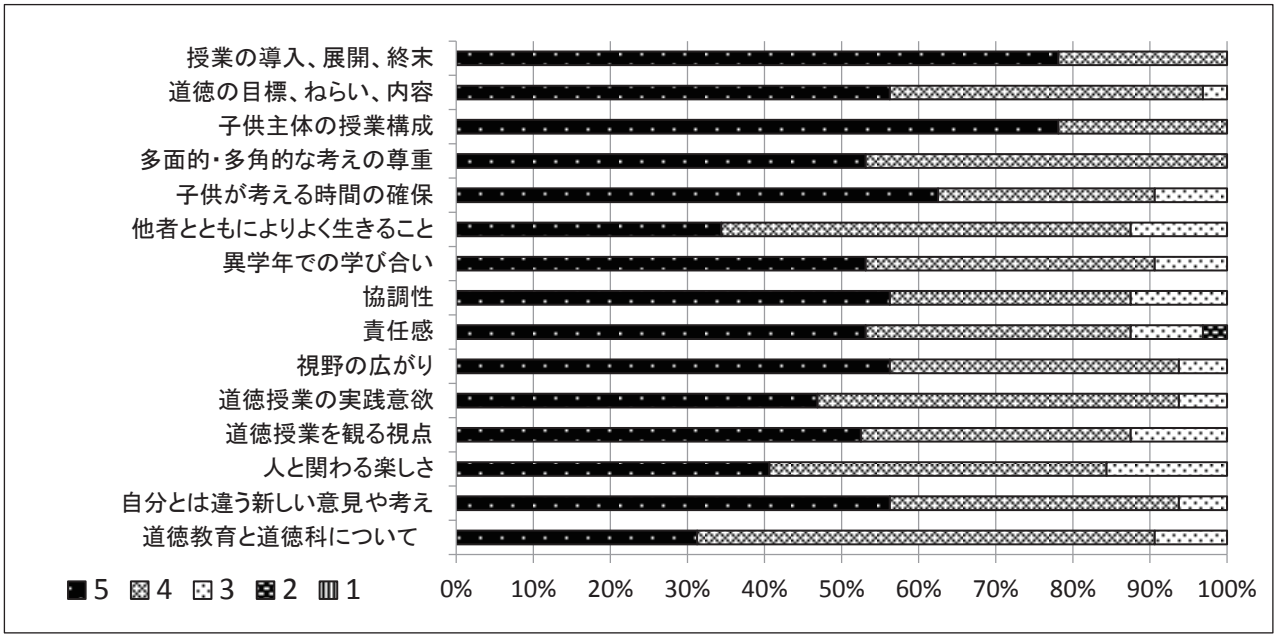


図４　受講して得たことや学んだこと

## 5．模擬授業と協議

### 5.1　模擬授業と協議の位置付け

授業計画の後半にあたる第10回から第14回に模擬授業と協議を位置付けた（表1）。受講者が今まで経験してきた道徳の授業を，「覚えていない」「登場人物の気持ちを追うだけ」という実態から前半に行う筆者による模擬授業を参考にさせたい意図がある。

**表１　「道徳教育指導法」授業計画**

| | |
|---|---|
| 第　1回 | 道徳教育とは |
| 第　2回 | 道徳の歴史，教科化の経緯，目標，内容項目 |
| 第　3回 | 道徳科の指導過程，道徳教育と道徳科の関係 |
| 第　4回 | 教員による模擬授業～葛藤場面のある教材～ |
| 第　5回 | 教員による模擬授業～価値のシートの活用～ |
| 第　6回 | 教員による模擬授業～聴き合い・折り合い～ |
| 第　7回 | 教員による模擬授業～映像教材の活用～ |
| 第　8回 | 評価について　指導案の書き方 |
| 第　9回 | 指導案を持ち寄って模擬授業を決める |
| 第10回 | 学生による模擬授業1　協議 |
| 第11回 | 学生による模擬授業2　協議 |
| 第12回 | 学生による模擬授業3,4　協議 |
| 第13回 | 学生による模擬授業5,6　協議 |
| 第14回 | 学生による模擬授業7,8　協議 |
| 第15回 | まとめ |

### 5.2　模擬授業実施のグループ編制

本年度は，受講者が37名だったので，1グループ4～5名の8グループを編成した。学年,男女比,リーダーとフォロワー等を考慮して，筆者がグループ編成をする（意図的編成）。そのメンバーで個々に作成した指導案を持ち寄って模擬授業の検討，練習，実践，振り返りをする。

### 5.3　模擬授業実施内容

第9回に各グループで指導案を持ち寄り検討する時間を確保している（表1）。この話し合いと同時に模擬授業をする順番を決める。その際，留意することは，実施日に全員が出席できることである。教育実習等で授業に出席できない受講者がいるグループを確認し合って決定する。

本年度実施した模擬授業の対象学年，内容項目，教材である（表２）。

**表２　令和元年　前期　模擬授業**

| 順番 | チーム名 | 対象学年・内容項目・教材名 |
|---|---|---|
| 1 | Free | 5学年<br>B(11) 相互理解<br>「すれちがい」 |
| 2 | ごはん | 1学年<br>C(10) 規則の尊重<br>「たまいれ」 |
| 3 | トロピカル | 2学年<br>B(6) 親切，思いやり<br>「公園のおにごっこ」 |
| 4 | ぴりか | 5学年<br>A(2) 誠実，正直<br>「多かった　おつり」 |
| 5 | カフェイン | 3学年<br>A(2) 誠実，正直<br>「やくそく」 |
| 6 | はいぼ～る | 5学年<br>B(9) 礼儀<br>「あいさつ週間」 |
| 7 | レッドブル― | 3学年<br>B(6) 親切，思いやり<br>「新幹線で」 |
| 8 | タケシ軍団 | 4学年<br>B(8) 礼儀<br>「おじさんがおこったのは」 |

※チーム名は，グループ内の受講者で決めたもの

### 5.4　模擬授業と協議の方法

1グループ4～5名受講者が，T1，範読，板書，机間指導等の役割を分担して模擬授業を行う。時間配分は，1授業に1グループ展開の回と2グループ展開の回があるため（表1),以下のように設定した。

第10,11回：模擬授業時間45分　協議時間25分

第12,13,14回：模擬授業時間30分　協議時間10分

これを2回繰り返す。

### 5.5　模擬授業と協議の過程

全8グループが模擬授業を展開し，その後に協議を行った。ここでは，変容が顕著に観られた実践を取り上げる。

初回の模擬授業は，準備期間が短いながらも教材はよく準備できていた。グループの練習が不足だったので，授業を客観視することができなかった。その結果，協議で「教材内容の理解する手立て」が課題として挙がった（図5)。

**2019.6.20　5学年　B(11) 相互理解「すれちがい」**

**【模擬授業】**
- 2人の女子が，一緒に習い事に行く約束をするが，お互いの事情によりすれ違いを生じる。自分の思いと相手の思いの「すれちがい」に気付かせる教材を活用。教材は読み聞かせ。
- 中心発問で「2人に足りなかったものは，何だろう」と考え，議論する。
- 児童の手元に教材がないため，2名の登場人物の名前や行動が理解しづらかった。よって，発問に対して考えることが困難だった。

**【協議】**
- ワークシートや掲示物の準備はよかったが，活用のタイミングを効果的にする工夫を。
- はじめに提示しためあてに違和感があった。
- 「ねらい」に合った授業だったか。
- 発問が多くて，授業の「やま」がなかった。
- 机間指導は児童の目線で行っていてよかった。
- 机間指導で〇をつけるとつかなかった児童は，承認されなかったと思うので控える。

課題：教材内容を理解する手立て

**図５　第10回模擬授業と協議（初回）**

**2019.6.27　1学年 B(10) 規則の尊重「たまいれ」**

**【模擬授業】**
- 運動会の「たまいれ」種目。1年生の主人公は，何度投げてもかごに入らない。最後に投げようとした時に終了の笛が鳴る。その後投げた球はかごに入る。結果1点差で勝つ。主人公は・・・
- 1学年に理解できるように紙芝居を作り，展開する。その紙芝居を掲示して，場面説明をする。

**【協議】**
- 教材を紙芝居にして，それを掲示してストーリーを振り返ったので，内容が理解できた。
- 児童の発言をしっかり聴き，その対応もよい。
- それぞれの発問に対して，同じ活動と時間を使っていたので，どれが中心発問か明確ではなかった。
- 自分事として考えることができたか。

成果：教材内容を理解する手立て→紙芝居活用
課題：中心発問に時間をかける工夫

**図６　第11回模擬授業と協議**

**2019.7.4　2学年 B(6) 親切，思いやり「公園のおにごっこ」**

**【模擬授業】**
- 公園で鬼ごっこして遊んでいると年下の「ゆうた」が「入れて」と言ってくる。入れて手加減して遊んでいると「ゆうた」は遊具の方へ行ってしまう。今度は，本気で「ゆうた」を追いかける。
- 中心発問後ワークシートに自分の考えを書き，グループで聴き合い活動，全体シェアリング。
- 児童の考えが把握しきれていなかったため授業に活かすことができなかった。

**【協議】**
- 場面ごとに絵を活用し，区切って考えさせたので，内容が理解できた。
- 場面ごとに登場人物の心情を追ったので，国語のようになった。板書量も多かった。
- 机間指導をして児童の考えを認めていたが，指導が入らなかったところがあった。

成果：中心発問に時間をかける工夫→活動の充実
課題：発問の数や板書量を減らす，精選する

**図７　第12回模擬授業と協議**

**2019.7.18　3学年 B(6) 親切, 思いやり「新幹線で」**

**【模擬授業】**
- 新幹線の中で具合が悪くなった主人公は，隣の男性に介護してもらう。その後男性は新幹線を降りるが，主人公は眼鏡を置いたままであることに気付く。どうにかその忘れ物を届けたい。
- 授業のテンポがよい。発問の数を２つに精選し，中心発問に時間をかけ，授業の「やま」が見られた。板書量も適切だった。

**【協議】**
- 板書が小学校の黒板に収まる量で構成された。
- 範読しながら場面絵を見せ，すぐに掲示していたので，効率がよかった。
- 親切にされた側と親切にした側の両方を考え発言させたのがよかった。
- 導入では「親切にしてもらったこと」終末では「親切にしたこと」と問う工夫もよかった。

成果：発問の数や板書量を減らし，精選できた
　　親切にされた側とした側の両者を扱った

**図８　14回模擬授業と協議**

翌週の模擬授業は前回の課題を改善し，教材内容の理解の手立てとして紙芝居を作成した。紙芝居を活用して教材を読み進め，それを掲示して簡潔にあらすじを追った。協議では，その実践がよい点として挙げられた。しかし，どの発問に対しても同じ活動と時間をかけたために，どれが中心発問かわかりづらかったことが課題だった（図 6）。

次の模擬授業では，補助発問は，一斉に問い掛け，数人の児童の発言を聴く程度に抑え，中心発問は，児童に考えさせた後，グループ活動，全体で共有する活動を充実させる手立てを取った。協議では，中心発問での取り組みがよかった点として出された。しかし，板書について小学校の黒板に納まる量に精選する（図 9）ことが課題として挙げられた（図 7）。

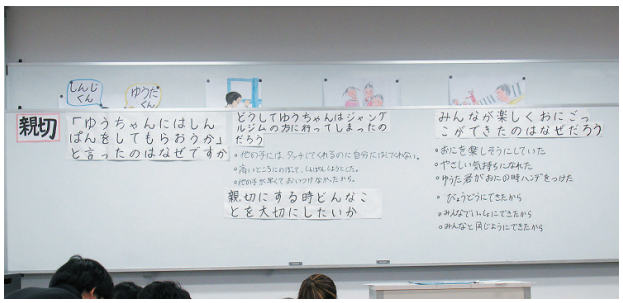


**図９　第 12 回　模擬授業の板書**

最終回の模擬授業は，板書量を精選する計画を立て，可動式ホワイトボードの 1 枚分に収めた（図 10）。

また，「親切」をする側とされる側の両面を考える工夫があり，道徳科の目標である「物事を多面的・多角的に考える」学習を迫っていた。協議でも「今までの課題を改善した授業だった」という意見が多かった（図 8）。

**図 10　第 14 回　模擬授業の板書**

## 6．考察

### 6.1　受講前　受講後アンケートから

受講前のアンケートから，道徳については，小中学生時の記憶が明確ではないが，道徳教育指導法で指導力や指導技術を学びたい意欲があることは確認できた。道徳授業の面白さや魅力を知ることで，さらに学ぶ意欲は増すものと思われる。

受講後のアンケートから，受講者が模擬授業を計画し，準備や練習をする際に，筆者による多様な道徳授業をみて学修したことが，模擬授業の実践に役立ったと考えられる。

図 2 の「受講した自分が思ったことをみると，「道徳は奥が深い」「道徳が好きになった」は 100%，「道徳は面白い」は 94%と肯定的に捉えていることが，わかった。この結果から，道徳授業の面白さや魅力を知ったと推察する。

指導技術の項目については，目的で述べた「発問の吟味」「板書」「教材理解の工夫」「机間指導」について考察する。受講後アンケート調査の（3）「教育現場で役立てたい内容」の結果で，「机間指導」「発問」「板書」が上位であった。模擬授業や協議で，これらの指導技術を教育現場で役立てたいと思ったことは，指導技術を獲得したからだと考えられる。受講後の感想をみると「机間指導のやり方や重要性」を感じたり，「教育実習前に知りたかったことが多かった」と思ったりする受講者がいた。この感想からも受講して指導技術が身に付いたことが窺える。

### 6.2　模擬授業と協議の積み重ねから

図 5 から図 8 の成果と課題に着目すると，前回の模擬授業後に協議して出てきた課題を次のグループが改善を図り，模擬授業を実践していることがわかる。「どうしたら児童にわかりやすい授業になるか」「児童主体の授業にするにはどうしたらよいか」が，協議を通して明確になったことと，受講者のよりよい授業を作ろうと努力した成果だと考える。

また，受講者の感想を分析すると，多くの受講者から授業の改善や向上に関する記述（二重下線部）が観られ，模擬授業と協議の積み重ねが，効果的であったことがわかった。それとともに授業を観る眼（着眼点）の向上があったこと（下線部）も，模擬

授業と協議を積み重ねた成果であった。この積み重ねが，「子供主体の授業を作ろう」（波線部）とする意欲にも繋がったことは，筆者の予想を上回る効果であった。

## 7．おわりに（課題から今後へ）

### 7.1　指導技術の項目について

本研究では，指導技術に関して，「発問の吟味」「板書」「教材理解の工夫」「机間指導」の４項目を挙げて，指導技術の獲得に至るか，調査を進めた。結果は，それぞれの項目につき，模擬授業の変容から成果があったと考えられる。しかし，この４項目は，道徳の授業独自の指導技術とは言い難い。今後は，心の位置を可視化する「心情円」「スケーリング」，体験的学習である「役割演技」等，道徳の手法技術について，研究を進めていきたい。

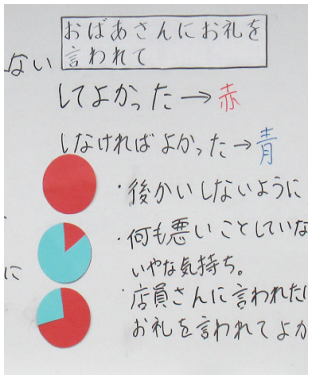


図 11　心情円の活用

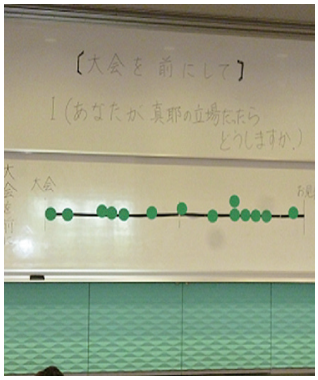


図 12　スケーリングの活用

### 7.2　模擬授業の実践について

「道徳教育指導法」の模擬授業は４～５名のグループで行った。しかし教育現場では，単独で授業を行わなくてはならない。また，模擬授業でT1，範読，板書，机間指導等の役割を分担して行ったので，自身が担当した指導技術の獲得はできたとしても，その他の指導技術を実践して獲得してはいない。この課題を改善するために，道徳関連授業である「実践力養成演習・道徳」において受講者に，単独で45分の模擬授業を行うように計画を立て，実践している。

しかし，学内での模擬授業は，学生が児童役になって模擬授業を行うことになる。これが一番の課題であると思われる。より実践に近づけ，子供によりよい道徳授業を行う技術を磨くためにも，近隣の小学校と連携を取り，学外で授業ができる環境を整える工夫をして，研究を進めていきたい。

## 文献

千葉県・千葉市教育委員会（2018）.『千葉県・千葉市教員等育成指標』

松本美奈・貝塚茂樹・西野真由美・合田哲雄（2016）.『特別の教科　道徳 Q&A』ミネルヴァ書房 .

文部科学省（2013）.「今後の道徳教育の改善・充実方策について（報告）～新しい時代を，人としてより良く生きる力を育てるために～」道徳教育の充実に関する懇談会

文部科学省（2014）.「道徳に係る教育課程の改善等について」答申.

文部科学省（2017）.『小学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編』廣済堂あかつき.

土田雄一（2017）.「教職大学院における『道徳教育実践研究』の実践と省察」千葉大学教育実践研究第 20 号 pp45-53.

柳沼良太（2017）.『道徳の理論と指導法「考え議論する道徳」でよりよく生きる力を育む』図書文化 .

B.Edu.Health Sci.UG Univ. vol.12, 107-116, 2020 Information

## Abstract

## A Moral Education Instruction Methodology for the Acquisition of Teaching Skills by Trainee "Teachers through the Accumulation of Mock Classes and Discussion"

Etsuko Murakami [1]
[1] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University,

Uekusa Gakuen University has adopted moral education as the foundation of its schooling philosophy. Along with the endeavor to nurture citizens who can create an inclusive society, our university aims to train teachers who can provide a moral education, such as the inculcation of compassion, through ethics and morality classes. To achieve this objective, the university considers it necessary for teachers to conduct morality classes with confidence. Morality began to be taught as a subject in elementary schools in 2018; therefore, appropriate teaching skills must be acquired to enable trainee teachers help children in contemplating and discussing morality at the initiative of the children themselves. The university seeks to enrich the instruction of morality by utilizing mock classes and discussions so that the teachers can learn the pedagogical methods of moral education. The results of the present study confirmed that the teaching skills of the targeted learners improved after having conducted the mock classes. A questionnaire was administered to the trainee teachers who attended these classes, and all the participants responded that they would like to use the teaching skills attained from the module in their educational practice. Future research projects should include collaboration with neighboring elementary schools to develop lessons, utilizing the teaching skills acquired by trainee teachers within educational settings to foster a sense of morality in children.

**Keywords:** special subject morality, mock lessons, discussion, teaching skills